

*** ダブルモノクロメーター、ヒルガー分光器を塔望遠鏡分光室へ移設**

2010年6月4日、塔望遠鏡の建物内部を台内にお披露目するまでこぎつけた。塔望遠鏡には半地下の大きな分光室がある。ここには建設当初設置された3個のプリズムを使った焦点距離345cmの分光器、グレーティングを使った分解能220,000の焦点距離12mの高分散分光器がある。その他にもいろんなバリエーションで光学素子を置き、いろいろな分光ができるよう光学素子のペアがたくさん置かれている。アーカイブ室では、国立天文台に残され、アーカイブ室の手に渡った分光器をこの分光室に集めようと考え、まず、以前塔望遠鏡から持ち出したダブルモノクロメーター(写真1)を塔望遠鏡に持ち返ることにした。持ち出した時には、塔望遠鏡は電気を止められており、湿度の高い塔望遠鏡の4階に置かれているよりは、天文機器資料館とした自動光電子午環の望遠鏡フロアの方がいいだろうという判断であった。今は塔望遠鏡の電気が回復し、除湿機5台をフル稼働させて日産30~40リットルの水を生産しているので湿度の問題はクリアできていると思っている。

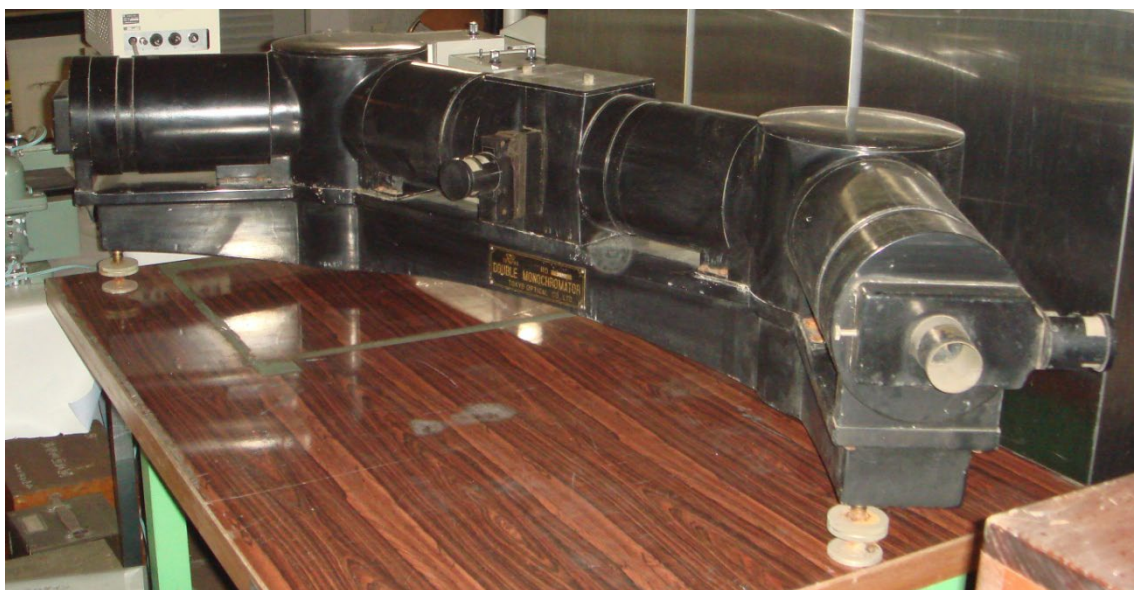


写真1 ダブルモノクロメーター



写真2 ダブルモノクロメーターの名盤

写真2はダブルモノクロメーターの名盤である。

天文機器資料館には、この他に基線尺倉庫から持ち込んだヒルガー分光器(写真3)があった。この分光器も塔望遠鏡分光室に移設した。これは相当な重量物で、天文機器資料館に持ち込んだときはクレーンを使ったのであるが、今回は屈強な助っ人が天文情報センターに入ったので人力で移動させることにした。ヒルガー分光器は岡山天体物理観測所に188cm望遠鏡と同時に納入されたカセグレン分光器、クーデ分光器のメーカーであるイギリスのヒルガー&ワット社の前身の会社製である。分光器にヒルガー分光器と書いてあったのでその素性を追求していなかったが、今回、移動の際名盤を探したら写真4のように「ADAM HILGER LTD. LONDON, ENGLAND」という刻印された文字が現れた。

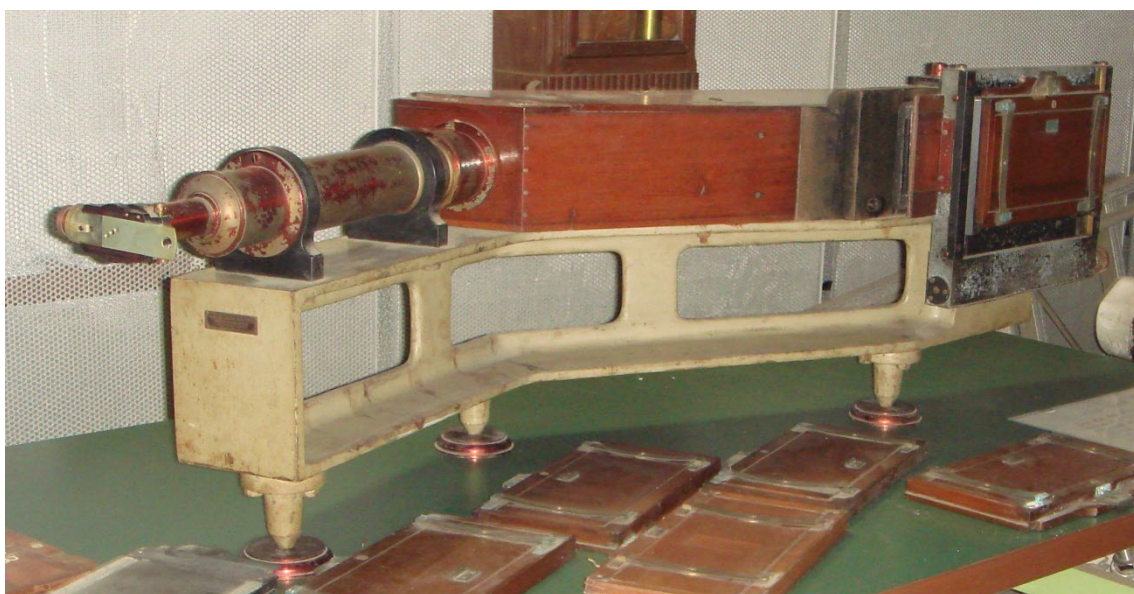


写真3 ヒルガー分光器



写真4 ヒルガー分光器の刻印

ヒルガー分光器には他にも名盤があり「L. J. HEALING & CO. LTD ENGINEERS & CONTRACTORS



写真5 取扱業者の名盤

TOKIO. OSAKA. DAIREN. LONDON & NEWYORK」 という名盤が貼られていた。この商社の所在地が、これも時代を表したものであろう。

この2つの分光器を塔望遠鏡分光室の中央のピアの上に並べたところが写真6である。

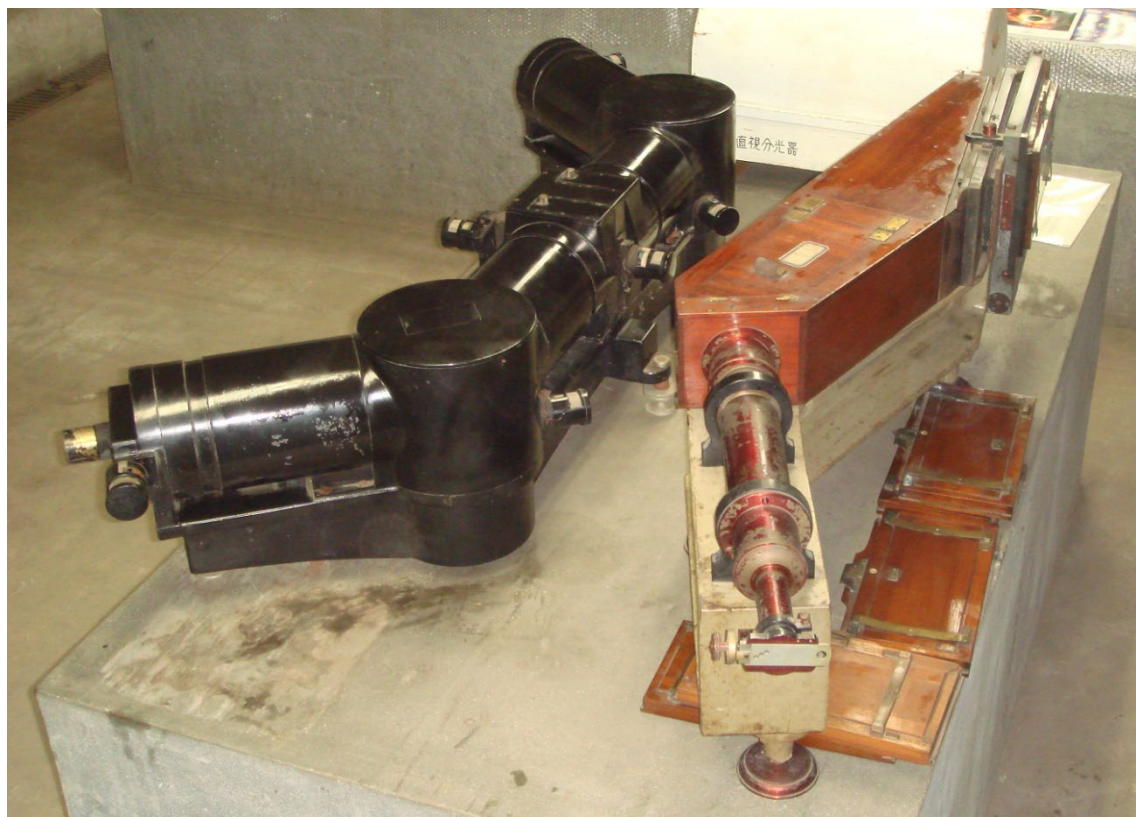


写真6 塔望遠鏡分光室に移された2つの分光器

まだ、展示していない分光器として乗鞍コロナ観測所から譲渡されたコロナグラフの直視分光器がある。また天文機器資料館には太陽分光写真儀室（オバケ）にあった太陽のカルシウムK線分光器がある。これらもこの塔望遠鏡分光室に移し、ここを分光器資料館にする考えが浮かんできた。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp